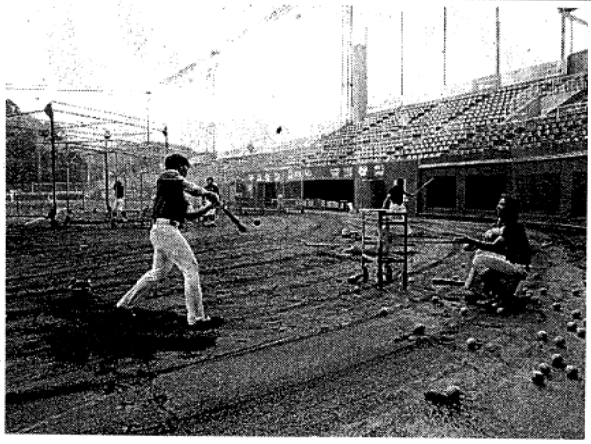
毎日新聞
平成27年8月31日

支局長からの手紙

地域のために

先日、和歌山箕島球友会の本拠地、マツゲン有田球場（有田市民球場）を訪ねました。9月4日から西武プリンスドーム（埼玉県所沢市）で開かれる第40回全日本クラブ野球選手権（毎日新聞社、日本野球連盟主催）を前に、選手たちはピリピリしているかと思ったら、リラックスした様子で快音を響かせています。



打撃練習に汗を流す箕島球友会の選手たち＝有田市のマツゲン有田球場で

1996年に発足して以来、この大会への出場は4年連続6回目。2006年と13年に優勝し、今回ももちろん、狙っています。優勝すれば10月26日に京セラドーム大阪（大阪市西区）で開幕する第41回社会人野球日本選手権の出場権が得られるため、西川忠宏監督は「これは通過点。予選のつもりでやる」と話します。

県内では99年に住友金属の野球部がなくなり、社会人野球チームは箕島球友会だけになりました。08年にNPO法人化し、11年から市の指定管理者としてマツゲン有田球場を運営。少年野球教室、高齢者施設や保育所での清掃活動なども続けています。

チームは選手、スタッフと賛助会員の会費、寄付金などで支えられています。賛助会員は年々増え、昨年は団体が47社、個人は317人。売り上げの一部が寄付される自動販売機の設置や有田市のふるさと納税による寄付など、支援の輪は広がっています。

昨年11月、全国の7クラブチームの代表者がマツゲン有田球場に集まり、勉強会を開きました。クラブチームの運営はどこも厳しく、箕島球友会の取り組みに学ぼうというわけです。

箕島球友会は毎年10人前後の選手を採用し、就職や住まいを仲介しています。入団セレクションの倍率は約3倍。仕事をして休日をすべて野球に充てるというハードな生活ですが、ここで野球をしたい一心で全国から有力選手が集まってきます。更に引退後も定住する選手が増えているそうです。

今年度は総合型地域スポーツクラブとして、子供から高齢者までを対象に筋力や体力アップを図るプログラムをスタートさせました。来年度からは対象事業を拡大します。

野球だけでなく、地域のためにできることをやる。箕島球友会が市民に愛され、「有田市になくてはならない存在」（望月良男市長）と言われるようになった理由はそこにあると思います。西川監督は「優勝するので、京セラドーム大阪へ応援に来てください」と話していました。選手たちの奮闘に期待したいですね。

【和歌山支局長・坂口佳代】